

皆様、こんにちは。

府中教会、アンドレアです。

本日、四旬節第四主日は、「喜び (laetare) の日」と呼ばれます。「神の民よ、喜べ」という本日の入祭唱は、わたしたちに喜ぶよう招いているからです。この喜びの源は何でしょうか。今日の福音朗読で読まれるように、それは人々に対する神の偉大な愛です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである」(ヨハネ3・16)。ニコデモと会ったときのイエスのこのことばには、キリスト教のメッセージの中心となるテーマがまとめられています。たとえ状況が絶望的に思えても、神はわたしたちのそばにきて、人々に救いと喜びをお与えになります。まさに神は、わたしたちから離れることなく、人間の歴史に入られます。

聖パウロが伝えているように「あわれみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してください、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストとともに生かし」(エフェソ2・4) てくださいます。キリストの十字架は、わたしたちに対する神の愛の最高のあかしです。イエスは「この上もなく」(ヨハネ13・1) わたしたちを愛してくださいます。それはイエスの地上における生涯の最後の時までという意味ではなく、愛の極限までという意味です。イエスはわたしたちのために苦しみ、死ぬために来られました。神のあわれみはそれほど豊かです。神はわたしたちを愛し、わたしたちをゆるしてくださいます。神は、どんな時もすべてをゆるしてくださいます。

